

造形的な見方・考え方を働かせ、

自分らしく表現する生徒の育成

〈造形的な視点に基づいた思考の力を高める指導過程の工夫〉

概要

授業中に見せる生徒の戸惑いの様子やアンケート調査の実態から、学習を通して自分の成長を感じることや、よりよいものを目指して試行錯誤したり、作品の完成度に自信をもったりすることが十分できていないことが課題として挙げられた。その要因として「よりよくするためのイメージがもてない」ことや「やり方が分からない」というような意識があることが考えられるとし、具体的なイメージをもつことができるような授業を展開したいと考えた。

その中で、特に作品を構成する「よさ」と造形的な特徴の結び付きに着目し、よさの理由となる造形的な要素の特徴を明

らかにすることで、造形的な見方・考え方を働かせ「迫力を出したいから大きく描こう」「優しさを表現したいから、淡い色を使おう」など、自分がつくりたいもののイメージを具体的にもったり、表現方法の具体的な道筋をもったりすることができるとはなかったと考えた。

そこで造形的な思考の力を高めることを切り口にし、造形的な視点を位置付けた指導計画の作成及び、資料提示の工夫や話し合い活動の充実、生徒が学びを実感するための手立ての工夫を具体的な研究内容とし、実践を進めた。平成29、30年度の2年間の実践を中心にまとめたものである。



みやた えいこ
宮田 栄子

勤務先：岐阜県 岐阜市立陽南中学校 教諭
出身校：岐阜大学 教育学部 美術工芸学科

I 主題設定の理由

授業の中で手が止まったり、「何も思いつかない」という声を聞いたりすることは、大変悲しいものである。このような生徒の姿の裏側には、どのような表現をしたら自分の願いを表現するのか具体的なイメージがもてていないことが考えられる。それは、作品を構成する形や色などの造形の要素と「よさ」が結び付いていないことが一因でないかと考えた。「よさ」というのは、作品が見る人に与える美しさや感動など、感情に作用する要素である。そして「よさ」の理由とは、その作品を構成する形や色に基づいた造形的な特徴のことである。「大きく描くと迫力が感じられる」とか、「淡い色使いだと優しい感じがする」とか、その感情を裏付ける造形的な特徴が、作品には必ず含まれている。しかし造形的な特徴とよさが結び付いていないと、「すごい」「うまい」と感じたとしても、その理由を明らかにすることは難しい。そのことによつて、「よい作品をつくりたいけれど、どうしたらよいだろう」と、イメージが曖昧になってしまい、つくりたいものやアイデアを豊かに発想させる妨げになっていたり、表現方法の具体的な道筋をもつことができなかつたりするのではないかと考えた。

そこで、よさの理由となる造形的な特徴を明らかにすることで、「迫力を出したいから大きく描こう」とか「優しさを表現したいから、淡い色を使おう」など、自分がつくりたいもののイメージを具体的にもつたり、表現

方法の具体的な道筋をもつたりすることができるのではないかと考えた。よさと造形的な特徴が結び付いてくれば、自分の願いに合わせて作品の形や色が具体的に becoming くる。このように、造形的な視点に基づいた思考の力を高めることで、造形的な見方・考え方を働かせ、自分らしく表現できる生徒を育成したいと考えた。

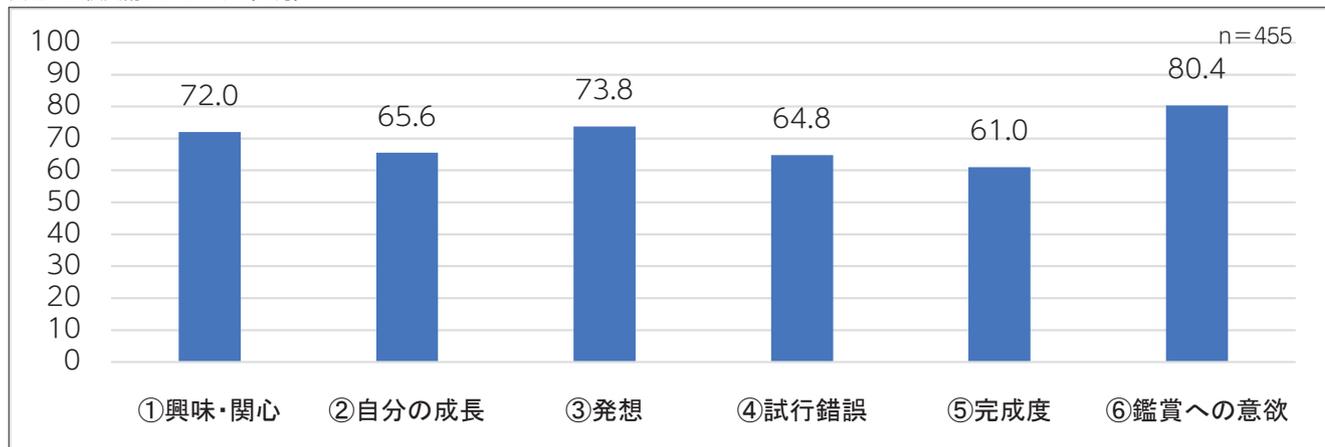
II 生徒の様子

4月当初に生徒の様子を把握するため、アンケートを行った【表1】。その結果をグラフにまとめて、美術に対する生徒の意識を分析した【表2】。

表1: 美術科のアンケート内容

① 美術の学習は好きですか。	(興味・関心)
② 美術の学習は自分の成長に役立つと思いますか。(自分の成長)	
③ アイデアやつくりたいものが浮かんで、わくわくすることがありますか。	(発想)
④ よりよいものを目指して、何度も直したり試行錯誤したりすることは得意ですか。	(試行錯誤)
⑤ 丁寧に最後まで作品を仕上げることに自信はありますか。	(完成度)
⑥ 他の人の作品を見ることは好きですか。	(鑑賞への意欲)

表2: 全校美術アンケート (4月)



アンケートについて

調査方法: 全校生徒対象。455人に対して調査。

質問項目に対する生徒の回答については、下記4件法で調査。

[1. はい 2. どちらかという はい 3. どちらかという いいえ 4. いいえ]

計算方法: $\{3n - \sum (Xi - 1)\} \div 3n \times 100 = \text{指数値}$

* nは生徒数。Xiはi番目の生徒の回答で、iは1からnまで変化。

この結果によると、①や⑥の設問の数値が高いことから、生徒は美術に対しての興味関心が高いことが分かる。

しかし、②、④、⑤の数値が低いことから、学習を通して自分の成長を感じることや、よりよいものを目指して試行錯誤したり、作品の完成度に自信をもったりすることが十分にできていないことが分かる。その要因として「よりよくするためのイメージがもてない」とことや「やり方が分からない」というような意識があることが考えられる。そこで制作のイメージをもてる手立てを工夫し、一つ一つ乗り越えさせていくことによって、生徒の満足度が高い作品を生み出し、美術の学習が自分の成長に役立つことを実感していけるのではないかと考えた。

Ⅲ 研究主題及び研究内容

「Ⅰ 主題設定の理由」や「Ⅱ 生徒の様子」から、研究主題及び研究内容を次のように設定した。

【研究主題】

造形的な見方・考え方を働かせ、自分らしく表現する生徒の育成
↳ 造形的な視点に基づいた思考の力を高める指導過程の工夫

【研究内容】

1 指導計画の工夫

(1) 造形的な視点を位置付けた指導計画の作成

2 指導方法の工夫

- (1) 造形的な視点に基づいた思考の力を高める資料提示の工夫
- (2) 造形的な視点に基づいた話し合い活動の充実
- (3) 生徒が学びを実感するための手立ての工夫

Ⅳ 研究仮説

「造形的な見方・考え方を働かせ、自分らしく表現する生徒の育成」を図るためには、豊かな発想で創造的に表現することが必要で、そのためには具体的な表現方法のイメージをもてることが大切である。しかし、どう表現したら自分の願いや主題をよりよく表現できるのかという点で、戸惑いを感じる生徒の様子をしばしば見ることができると考えられる。

これは作品のイメージに対する造形的な特徴を曖昧に捉えているからだと考える。つまり、よりよい作品を生み出すためには、「本物らしく描きたいから、光と影によって生まれる明暗を意識した」というような造形的な視点に基づいた思考によって、イメージを明確にすることが大切で、その力を高めていくことが必要だと考えた。そこで研究仮説を次のように設定した。

【研究仮説】

指導計画に造形的な視点を位置付け、付いた力を具現できるように計画する。さらに単位時間に於いて造形的な視点に基づいた資料提示の工夫や話し合い活動の充実を図ったり、生徒が学びを実感するための手立てを工夫したりすることで、造形的な視点に基づいた思考の力を高めることができる。それによって具体的な表現方法のイメージをもち、造形的な見方・考え方を働かせ、自分らしく表現する生徒を育成することができる。

V 研究実践

1 指導計画の工夫

(1) 造形的な視点を位置付けた指導計画の作成

指導計画では単位時間ごとに気付かせたい造形的な視点を位置付けた【表2・表3】。例えば2年生題材「心でとらえたイメージ」第4時の「アイデアスケッチ②」の学習では、指導計画に「配置、大きさ、方向、空間」などの立体バランスに関わる造形的な視点を位置付けている【表3・※1参照】。この題材は「曲」をきっかけにして、心でとらえたイメージから主題を生み出し、スチレンペーパーを使って立体的に表現するというものがある。「曲」という目には見えないものから主題を生み出すため、抽象的な言葉から発想し、作品も、抽象的な造形表現となる【図1】。作品制作にあたっては、形や色、材料、光



「秘めた強さ」



「熱情」



「思い出」

図1：2年生題材「心でとらえたイメージ」生徒作品

など、様々な造形の要素が絡み合ってくる。その造形の要素を視点として、生徒が主題との結び付きを自分で考えることが大切だと考える。そのため、気付かせたい造形的な視点を指導計画に位置付けることで、題材の中の付けたい力を明確にし、教師がどのように単位時間を仕組んだらよいかということについて考えを深められるようにした。

2 指導方法の工夫

(1) 造形的な視点に基づいた思考の力を高める資料提示の工夫

造形的な視点に基づいた思考の力を高めるためには、作品のよさの中に、どのような造形的な特徴があるのかということ、生徒自身が把握することが必要である。美術には明確な答えがなく、どちらかという美術の活動では、個人の感覚的な表現方法に委ねがちである。しかしながら、よい作品には、それを裏付ける造形的な特徴が必ず含まれており、それに生徒自身が気付くことによって、造形的な視点に基づいた思考の力を高めることができると思った。そこで、授業の中では、造形的な視点に着目させるために、資料提示の仕方を工夫した。

例えば3年生では「自分のポスターをつくろう」という題材を行う。これは自分に関わることをモチーフにして構成を工夫し、平面作品として表現するというものである【21ページ・図2】。

資料提示の工夫の実践として、この題材の

表3：2年生題材「心でとらえたイメージ」指導計画（一部）

時	ねらい	学習活動	教師の支援及び評価規準	付けたい力(◎)と、 気付けたい造形的 な視点(●)
1	抽象表現の作品を鑑賞し、造形的な特徴を見つけて、よさを感じとる。 【作品鑑賞】	① 作品を鑑賞し、よさや造形的な特徴を見付け出す。 作品を鑑賞し、よさや形や色の特徴を見付けよう ② 見つけた造形的な特徴を交流する。 ③ 抽象表現のよさについて話し合う。	• 視点を与えて鑑賞させ、たくさんの造形的な特徴に気付けるようにする。 • 抽象表現のよさを感じることができたかどうかを生徒の様子から見届ける。 【鑑賞の能力】 造形的な視点に基づいて作品のよさを感じ取っている。 ※発言、ワークシート	◎ 造形的な視点に基づいて作品を鑑賞し、抽象表現作品のよさを感じ取る。 • 形や色などの特徴とよさの結び付き。
2	好きな曲を基にして、自分の主題を明確にする。 【テーマ決め】	① 自分の選んだ曲について考える。 曲を手がかりにして、自分の主題を明確にしよう ② 曲の歌詞やメロディのイメージを線で表現する。 ③ 自分の主題を言葉で明確にする。	• 歌詞やメロディをどのように線で表現するのか具体的事例を示す。 【発想や構想の能力】 自分の主題を明確に言葉で表している。 ※ワークシート	◎ 曲から感じたことを言葉で表しながら、主題を明確にする。 • 線の種類 • 線の方向 • 線の数
3	主題を基にして構想した形を、スケッチに表す。 【アイデアスケッチ①】	主題をよりよく表現する形を考えよう ① 主題をよりよく表現できる形について線のスケッチで考える。 ② 主題をよりよく表現した形になっているかを交流し、振り返る。	• 資料から、どのような形の表現方法があるのかを見付け出し、制作のイメージをもたせる。 • ペア交流で主題をよりよく表現する形になっているか評価・助言し合う。 【発想や構想の能力】 主題をよりよく表現するための形を工夫して構成している。 ※スケッチ	◎ 主題をよりよく表現するための造形的な視点に基づいて構成する。 • 強調 • 省略 • 変化
4	自分の主題に基づいて、スケッチしたものを立体に表す。 【アイデアスケッチ②】	① 資料から、造形的な特徴と感じ方の違いについて話し合う。 主題をよりよく表現するマケット(模型)をつくらう ② 造形的な視点に基づいてマケットをつくる。 ③ マケット制作を交流し、振り返る。	• 実際のマケットを見せることで、制作のイメージをもたせる。 • ペア交流で主題をよりよく表現するマケットになっているか評価・助言し合う。 【発想や構想の能力】 自分の主題をよりよく表現するための造形的な視点に基づいて、マケットをつくっている。 ※態度、作品	◎ 主題をよりよく表現するための造形的な視点に基づいて構成し、立体に表す。 • 立体的なバランス(配置、方向、大きさ、空間) ※ 1 (→ 18 ページ)



図2：3年生題材「自分のポスターをつくろう」生徒作品



この資料から「奥行き」「動き」「余白」「強調のための効果線」「全体の大きさのバランス」といった工夫の造形的な視点を導き出した。

図3：3年生題材「自分のポスターをつくろう」提示資料



図4：Aさんの作品

下絵をつくる場面では、資料の組み合わせ方によって、感じ方の違いに気付けるような資料を提示し、自分の主題をよりよく表現するための造形的な視点について考えを深めることができるようにした【図3】。

例えば、3年生のAさんは、作品の主題として自分が今まで頑張ってきたことを設定しており、部活動のバレーボールと勉強道具を組み合わせて場面を構成していた【図4】。そして、この授業の振り返りでは「重ねて描くことで奥行きが出るようにした。余白ができてしまったので、文字を入れるなど工夫したい」と記述していた。この振り返りから、Aさんは導入で導き出した「奥行き」という視点に基づいて工夫をしていることが分かる。さらに次の時間には「余白」という造形的な視点を意識しながら制作し、文字を入れることによって、課題解決への工夫をしながら

ら制作を進める姿があった。

また2年生題材「心でとらえたイメージ」の、アイデアスケッチを具体的な立体として表すマケット（模型）づくりの場面では、部品の配置や大きさを変えた資料を提示して比較することで、感じ方の違いと造形的な特徴について考えられるようにした【図5】。

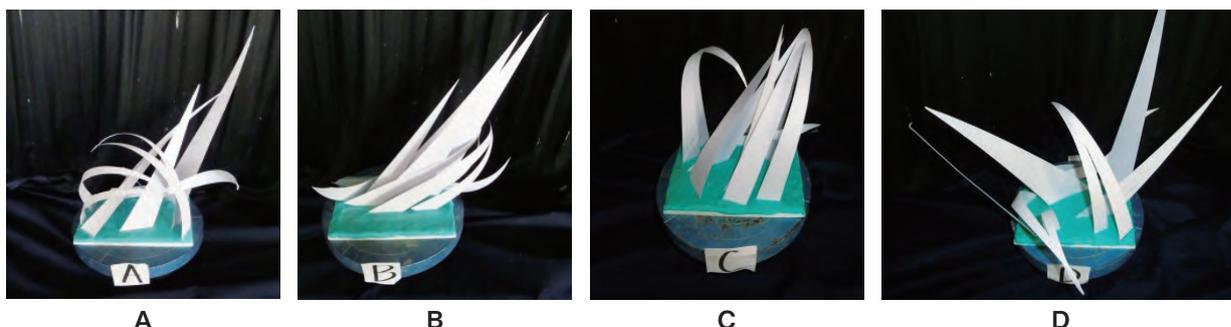
この資料を通して考えることで「配置」「空間」「大きさ」「方向」などの、立体を造形するために必要な視点を生徒が自ら捉えられるようにした。

授業後の振り返りからは、「つくってみただけど、大きさや方向がバラバラなので：」「全体的に大きくしてつくることので：」など、視点に沿って工夫や課題点を記していることが分かる【図6】。

(2) 造形的な視点に基づいた

話し合い活動の充実

授業の中では、本時の造形的な視点に基づいて話し合いをしたり、仲間の作品を見たりする場面を多く取り入れ、作品をよりよくしていくための視点を生徒が主体的に学ぶことができるようにした。授業の学び方として「一人学び」と「仲間学び」を設定し、生徒に提示して学び方を指導した【23ページ・図7】。特に1年時の仲間学びでは、作品からよさを見付けてその理由を考えることを中心に取り組み、2・3年生では、お互いに評価・助言をすることで、新たな工夫の視点を見付け出すことを重点に取り組みようにした。



AとB、C、Dを比較して考える。Bは部品の配置が偏っている。
Cは部品の大きさがどれも同じくらいである。
Dは部品の方向が主題に合っていない。

図5：2年生題材「心でとらえたイメージ」提示資料



授業の振り返り 11月2日	
①一人学びでは、集中してよりよいものを目指せたか。	(A・B・C)
②仲間学びでは進んで挙手や話し合いができたか。	(A・B・C)
③今日の課題がクリアできたか。	(A・B・C)
作ってみたいけど、大きさは、方向がバラバラなので、次は、方向と大きさに気をつけて作ってみたいです。	

授業の振り返り 12月4日	
①一人学びでは、集中してよりよいものを目指せたか。	(A・B・C)
②仲間学びでは進んで挙手や話し合いができたか。	(A・B・C)
③今日の課題がクリアできたか。	(A・B・C)
今日は、全体的に大きくして作ることで、はくりよさあわゆる、頂点をくまなくつなぐ紙を乗せるとか、できた。	

図6：2年生題材「心でとらえたイメージ」生徒作品と振り返り

生徒は、自分が制作している作品が、自分の願いや主題をよりよく表現しているものになっていくかどうかを客観的に評価することは難しい。しかし自分の作品を客観的に評価する場がないと、よりよくするための試行錯誤をすることなく制作が終わってしまうこともある。そこで、仲間の作品からよさを見付けたり、お互いの作品を評価・助言したりする仲間学びの活動を通して自分の制作をよりよくするための新たな視点をもたせるようにすることを大切にしたい。

例えば1年生題材「鉛筆名人になろう」では、単位時間ごとに仲間学びの場面を位置付けた。黒い色画用紙に色鉛筆で体育館シューズを描いていく題材であるが、授業の中盤に仲間学びを必ず位置付け、全体交流で仲間のよさを見付けるといった活動を行った。授業の中盤に取り入れることで、今までの自分の制作を振り返りながらも、仲間のよさを新たな工夫の視点として自分の作品に取り入れようとする意識をもたせることを目指した。この題材の第4時の仲間学びの様子では、Bさん

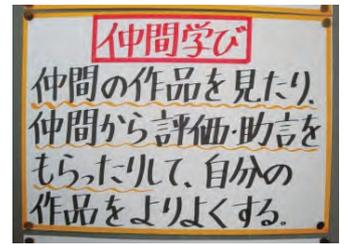
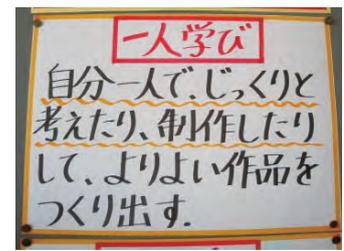


図7：一人学びと仲間学びの定義

は振り返りで「今回はクロスハッチングを意識して描きました。また、Cさんのよさを生かして、本物以外の色も塗ってみました」と記述しており、この様子から、見付けた仲間のよさを新たな工夫の視点として、積極的に取り入れてよりよいものを目指していることが分かる【図8】。

さらに2年生題材「いろいろな私」の効果的な技法の取り入れ方について考える学習では、ペア交流による仲間学びの場面を位置付けた。学習内容は「マーブリング」や「ドリッピング」などの技法を学習した後、自分の表現したい作品の気持ちに合う技法を考えながら画面を構成する活動である。その時



生徒Cの作品：
ひもの部分に色を重ねて描いている



生徒Bの作品：
仲間学びで見付けた「よさ」を自分の作品に生かして制作している

【仲間学びの記述から】

Cさんの作品で、本物とは違う色でより明暗が付けられていてよかったです。取り入れたい。

図8：1年生の学びの様子

に、Dさんは、「くるしい」という作品の構成にどのような技法を取り入れたらよいかについて迷っていた。そんな中、ペアの仲間学習で「ハートは苦しい感じを出すために、ドリッピングや吹き流しがいいと思うよ」という助言をもらった。そこでDさんは、その助言を取り入れながら計画を立てることができた【図9】。このように、ペア交流による仲間学習を取り入れることによって、どの生徒も客観的な評価・助言をもらうことができ、よりよい作品をつくるために新たな視点をもつことができることを目指した。

(3) 生徒が学びを実感するための手立ての工夫

授業を通して、どんなことを学んだりどんなことができるようになったりしたのかを生徒自身が自覚し、自分の活動に満足感や自信をもったりすることが自分の成長を実感することにつながる。そのためにはまず、振り返りの視点と振り返りの仕方が大切であると考えた。そこで、振り返り時にはどのような視点で振り返ればよいか分かるように導入で確認した視点を確かめたり、振り返りの内容のどこが良かったのかを、その都度評価したりするようにした。また、振り返りプリントには困ったことなどを記入できる欄を設け、時間内に支援できなかった生徒を把握し、次時の個別支援に生かせるようにしたり、生徒の学習状況を把握したりできるようにした

【図10】。

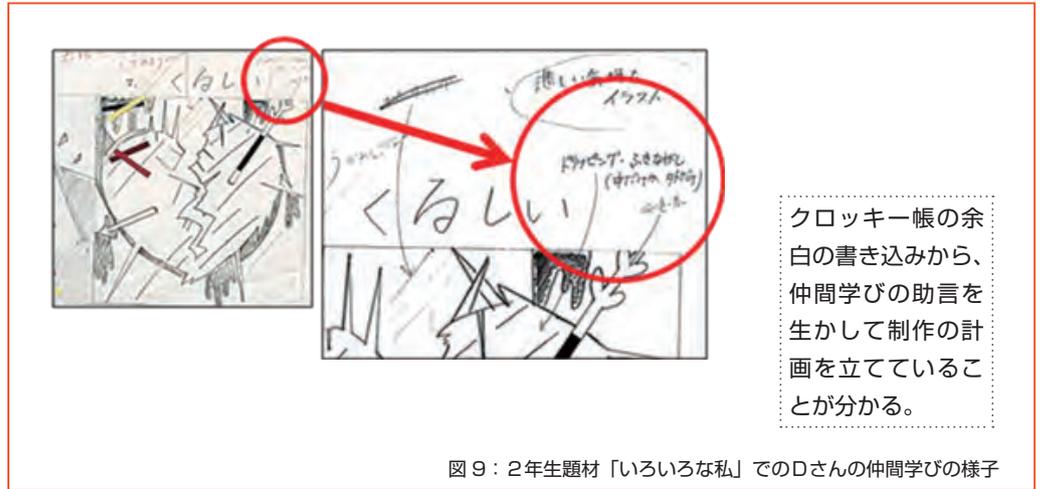
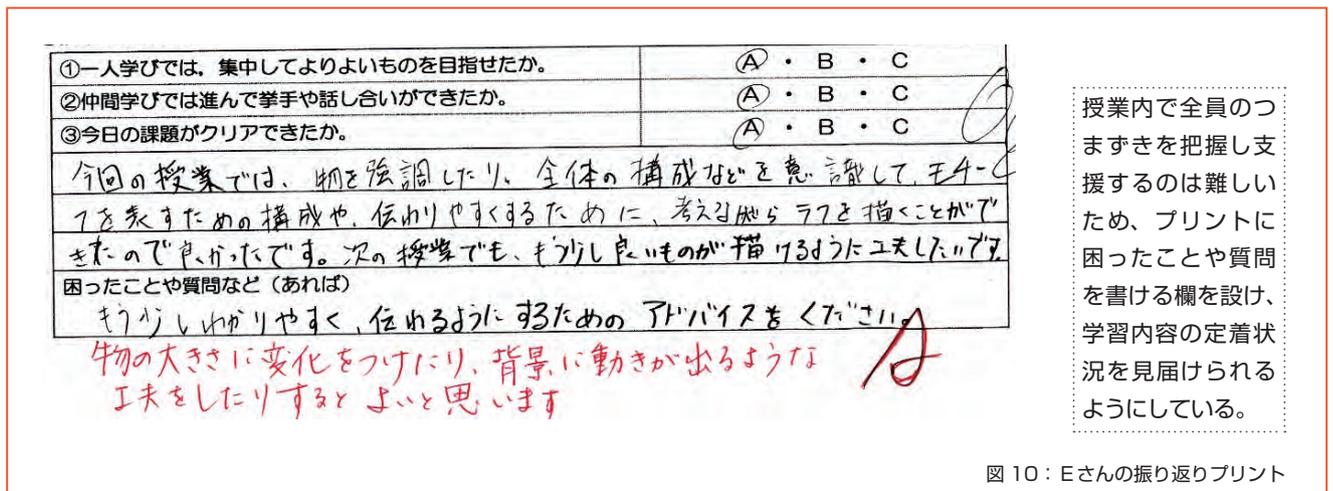


図9：2年生題材「いろいろな私」でのDさんの仲間学習の様子

また【25ページ・図11】は、仲間学習を通して自分の制作について振り返っている生徒の記述である。この生徒の記述から、アドバイスを生かすことで、自分の作品をよりよくできたと感じていることが分かる。このように教師や生徒同士の評価・助言を積み重ねる



授業内で全員のつまずきを把握し支援するのは難しいため、プリントに困ったことや質問を書ける欄を設け、学習内容の定着状況を見届けられるようにしている。

図10：Eさんの振り返りプリント

Ⅵ 成果と課題

4月に行ったアンケートを10月に再び行い、結果をグラフにまとめて生徒の意識を調査した【表4】。この結果を見ると、課題であった「②自分の成長」「④試行錯誤」の項目で、やや数値に向上が見られる。造形的な視点に基づいて考えたり話し合ったりする場を設定することで、制作のイメージをもてるように

ことで、自分の活動に満足感や自信をもち、自分の成長を感じることができるとを目標とした。



シュッと伸びるような作品は「思い出」という主題に合わないと思ったので、あえてぼらつく感じにした。位置についてのアドバイスをもらうことで、土台を余すことなく使えた。

図 11：Fさんの作品と振り返り

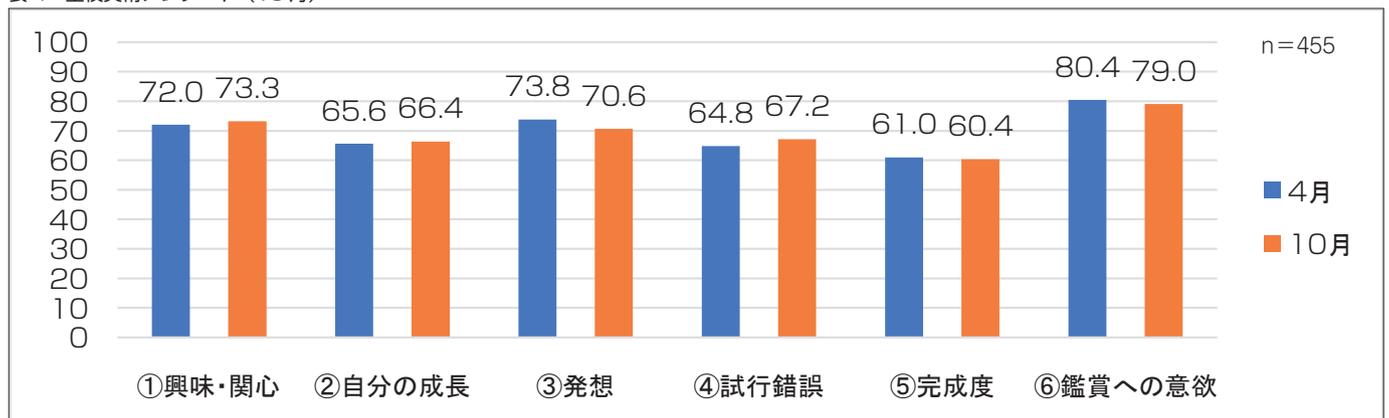
しながら、単位時間を組み立てたことが、授業の中で生徒の満足感を高めたり、自分の成長を実感させたりしていけるという可能性を感じている。

しかしながら、その他の項目では数値の減少傾向がみられるので、さらに生徒の課題意識に基づいた手立てを考えていく必要性を感じた。例えば、③「発想」に対しては、長く続く題材であったとしても、単位時間ごとに生徒の期待感を高め、豊かな発想を生み出せるような指導過程の工夫について考えていくこと、⑥「鑑賞への意欲」に対しては、話し合いの内容を造形の要素に基づいて価値付け、鑑賞を通して自分たちの思考が高まるような実感を持たせていくなどの取り組みを考えていきたい。

さらに【26ページ・図12】に示したのは、1年生題材「鉛筆名人になろう」での生徒作品と振り返りである。

GさんとHさんは、作品の完成度には差があるが、自分の制作に対して、どちらも満足感を感じていることが分かる。同じ体育館シューズを描いても、その作品の表現が多様になるところが美術のよさである。自分の作品に満足感をもてることは、自分の成長を実感できることにつながる。特に振り返りの中には、「明暗の描き方や塗り方が分かり、いい授業になりました」「面に沿った線を引くことで、体育館シューズを丸く描いたり、立体的に描いたりすることができた」などの題材を通して自分ができるようになったことを自分自身で自覚していることが分かる。

表 4：全校美術アンケート（10月）



アンケートについて

調査方法：全校生徒対象。455人に対して調査。

質問項目に対する生徒の回答については、下記4件法で調査。

[1.はい 2.どちらかというとい 3.どちらかというといいえ 4.いいえ]

計算方法： $\{3n - \sum (Xi - 1)\} \div 3n \times 100 = \text{指数値}$

※ nは生徒数。Xiはi番目の生徒の回答でiは1からnまで変化。



(Gさん)

鉛筆名人になれた気がします。明暗の描き方や色の塗り方などが分かり、いい授業になりました。この授業を生かして、これよりさらにより作品をつくっていきたいです。



(Hさん)

面に沿った線を引くことで、体育館シューズを丸く描いたり、立体的に描いたりすることができた。できたことがあったので、楽しみながら絵を描くことができたから、次回も楽しみながら取り組めるといいです。

図 12：1年生題材「鉛筆名人になろう」の生徒作品と振り返り

生徒一人一人がもっている美術的な能力には個人差があるが、自分のもっている力を十分に出せたかどうかという点においては平等であり、このように、どの生徒も満足感をもって題材を終えることができるような指導を今後も大切にしていきたい。

以上のようなアンケート結果や生徒の振り返りから、成果と課題を次のようにまとめた。

- ・指導計画の工夫により、単位時間での造形的な視点を明確にすることで、指導内容が明確になり、それによって、生徒も造形的な視点に基づいた思考を積み重ねることができた。

- ・単位時間において、造形的な視点に基づいて考えたり話し合ったりする場を設定することで、制作のイメージをもたせるようにすることが、生徒の充実感を高めたり、自分の成長を実感させたりしていけるという可能性を感じた。

- ・アンケート結果などから課題として示された、発想の能力や鑑賞への意欲などを高める手立てについても、指導計画の中に具体的に位置付けていきたい。